

難波西鶴と海ノ道

【15】

森田 雅也

前回、「最上の紅花大恩」と吉原すずめにもてはやされた鈴木清風(1651~1721)が、芭蕉と西鶴との接点として重要な人物となりましたが、その続きです。

清風は最上川の舟運を利用して、紅花を酒田港へと集積し、西回り航路を利用して、京阪へ、江戸へと往来しました。特に西鶴・芭蕉の全盛期、10歳ほど

年下であった彼は公私ともにエネルギーに活躍したでしょう。

清風はまた、紅花問屋としてだけではなく、その財力によって金銀業でも成功していましたから、江戸にも屋敷を持っており、その豪遊をもって、吉原遊郭でも名前が知られていました。清風の名は東北屈指の大富豪として有名だったので

鈴木清風という豪商

てなりたや殿様に」とをすれば、宗因を頂点という俗語で知られる酒田の天下の大富豪・本間家はこの時期は頭角を現していません。特に有名な本間光丘の活躍は、70年ほど待たなくてははいけません。

俳人としての清風は菅野谷高政著『詳譜中庸姿』(「延宝7(1679)年刊」)に独吟歌仙一巻が収められています。この書は「宗因に心酔する高政が、京都談林の力を誇示しようとして出版したものである(『俳文学大辞典』)です。清風は、西鶴の師、西山宗因の京都談林門下の先鋒にあ

ったということです。同門と言っても、一世を風靡した談林派を非常に荒っぽい分け方

『稲筈』(『詳譜一橋』)を刊行するほどの本格的な学芸の場でした。京都、江戸での俳人と

の交流関係は深く、この中にはやはり西鶴と芭蕉、江戸俳壇と大坂俳壇とを結ぶ重要人物で、西鶴門の権本才

もいました。西鶴と清風のつながりは伝記のない西鶴ですら明確ではありません。ところが、芭蕉は一門あげて、江戸小石川にあった清風の屋敷で句会を行っていました。とりもつたのは才

鷹でした。西鶴と芭蕉の縁は案外、東北にあったのかも知れませんね。(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

東北にあった？西鶴と芭蕉の縁